

# 日本漢音における軽声の消滅について

——漢籍を資料として——

## 目次

- 一、本稿の目的
- 二、軽声点が無くなる時期
  1. 漢籍訓点資料
  2. 漢籍字音直読資料——「蒙求」——
- 三、調値変化と変化の理由
  1. 入声軽の場合
  2. 平声軽の場合
- 四、軽声の消滅理由
  1. 漢音声調の特殊性
  2. 漢字の声調を維持できた理由
  3. 軽声の消滅理由
- 五、軽声消滅後の四声体系と『廣韻』声調・清濁との対応関係
- 六、軽声点の消滅が意味するもの

佐々木 勇

七、むすび

付、声点加點の衰退

## 一、本稿の目的

日本漢音の声調は、平安時代から、主に訓点資料によつて知ることができる。従来の研究によつて、日本漢音の声調体系は、六声体系が中心であつたことがわかっている。この状態は、鎌倉時代に入つても変わらない。<sup>(1)</sup>

ただし、時代が降るとともに、軽重・平声・入声・入声・入声の加點が平安時代の区別の基準をはずれるものが多くなる。<sup>(2)</sup>そして、室町時代以降の漢籍声点加點資料では、輕声点を一切加點しないものが大部分となる。<sup>(3)</sup>

そこで、本稿では、日本漢音における輕声の消滅について、以下の点を調査したい。

1. 輕声点が見られなくなるのはいつか。
2. 平声・入声の輕重の調値はどうなつたのか。
3. 輕声が消滅したのはなぜか。
4. その結果できた四声体系は、どのようなものか。

本稿では、加點年代が明らかな資料が多く残存している漢籍の訓点資料の実態を見てみたい。<sup>(4)</sup>

## 二、輕声点が無くなる時期

### 1. 漢籍訓点資料

鎌倉時代前半までの漢籍訓点資料は六声体系が一般的であることが知られているため、ここでは取り上げないことにする。鎌倉時代後半以降の漢籍訓点資料を管見の範囲で調査してみたのが、後掲の「一覽表」である。これは、加點年

の判明する資料を中心に調査したものである。<sup>(5)</sup>

「一覽表」から、大きな流れとして、時代が降ると六声体系から四声体系へ移行することが確認できる。南北朝期の前半までは原則として六声体系であり、南北朝期の後半から四声体系が中心となっている。

南北朝期の後半以後の六声体系の資料は、例外的である。室町時代で六声である107『古文孝経』一五三七年点は鎌倉末期点の転写本である。また、130『論語』江戸初期点の声点は、巻頭にわずかに加点されているのみである。この資料は、46建武本『論語』との校合の注があり、六声は底本の名残と考えられる。

よって、この度の調査の範囲で、轻声点が加点されなくなるのは、64書陵部蔵『老子経』至徳三年（二三八六）点からと見られる。<sup>(6)</sup>

これによって、加点年を確定できず南北朝期点とした資料のうち六声のものは、南北朝の前半の加点ではないかと逆に推測可能であろう。

## 2. 漢籍字音直読資料——『蒙求』——

漢籍字音直読資料として、『蒙求』をとりあげる。『蒙求』については、声点加点の比較的多い資料の声調表を「『蒙求』における日本漢音声調の伝承と衰退」（訓点語と訓点資料）第九十九輯、一九九七年三月）に掲げているので、参照願いたい。

次に、鎌倉時代以降の主な資料を加点の古いものから順に並べ、六声・四声の別のみを記す。

六声体系 a 東洋文庫蔵鎌倉後期点

六声体系 b 天理大学附属天理図書館蔵道順点 一三二〇年頃点

六声体系 c 天理大学附属天理図書館蔵康永四年（一三四五）点

日本漢音における轻声の消滅について

六声体系 d 真福寺藏南北朝期点

六声体系 e 大東急記念文庫藏応安七年(一三七四)頃点

六声体系 f 国立国会図書館蔵一四〇〇年頃点

四声体系 g 天理大学附属天理図書館蔵延徳二年(一四九〇)点

四声体系 h 京都大学附属図書館蔵大永四年(一五二四)点

声点無し i 国立国会図書館蔵一五二五年点

声点無し j 東京大学総合図書館蔵一五三七年点

『蒙求』では、南北朝期に軽声の加点が少なくなり、室町時代に入ると四声体系が一般的となって、ついに声点加點自体が見られなくなる。六声体系と四声体系との境目に資料が不足しており、明確な線が引けないが、漢籍訓点資料の結果を否定するものではない。<sup>(7)</sup>

右のA・漢籍訓点資料、B・漢籍字音直読資料の検討によって、漢籍においては、南北朝期の前半まで軽声点が加點され、南北朝期の後半から軽声点が無くなることが知られる。

### 三、調値変化と変化の理由

軽重の声点の区別が無くなる背景には、調値の変化があつたはずである。本節では、入声軽・平声軽の調値がどのように変化したのかを見るとともに、その理由を考えたい。

柏谷嘉弘「圖書寮本文鏡秘府論の字音声点」(『国語学』第六一輯、一九六五年六月)は、訓点資料五点(『史記』孝文本紀延久五年へ一〇七三〃点・『白氏文集』卷第三・四天永四年へ一一一三〃点・『文鏡秘府論』保延四年へ一一三八〃点・『春秋経伝

集解『保延五年へ一一三九〕点・『遊仙窟』康永三年へ一三四四〕写点』を比較し、軽声について次の指摘をしている（要約して記す）。

1. 入声軽と入声とが混同する傾向が見られる。

（十一世紀後半には見られ、十二世紀中葉には、両声は全く混同した。）

2. 平声軽が平声に発音される傾向が見られる。

（十一世紀後半には見られ、十四世紀初頭には、両声は全く混同した。）

声点加の実態から、入声の軽重の方が平声の軽重よりも早く混同していることが指摘されているのである。<sup>(8)</sup>  
そこで、入声軽と平声軽とを分けて考えたい。

### 1. 入声軽の場合

入声軽は高平調入破音であり、入声重は低平調入破音であったというのが現在の定説である。<sup>(9)</sup>

この入声軽と入声重とは、右に確認したように、十二世紀半ばには混同したとされている。

『蒙求』字音点においても、平安中期点ですでに規則の例外が多く、中華民国国立故宫博物院蔵本十二世紀後半点では、軽重が区別されていたものかどうか疑わしい。<sup>(10)</sup>

このように、かつての規則に合わない例が増えることから、調値の変化が推測される。事実、調値を示す節博士の分析から、鎌倉時代中期に入声の軽重は調値上の区別が無かったことが指摘されている。そして、一つとなった調値は、かつての入声軽（高平調入破音）のものであったことがわかつている。<sup>(11)</sup>

すなわち、入声軽の調値は変わらず、入声重に属していた漢字の調値が入声軽と同じ高平調入破音になったということである。

入声のうち入声重となるのは、全濁声母字のみで、少数であったので、全体数が多い入声軽の調値に統合されたものと思われる。漢籍訓点資料の中に、全濁声母字においても入声軽点が入声重点より多い資料がある<sup>(12)</sup>のも、調値が入声軽に統一されたことの反映であろう。

ただし、入声における軽重の調値の区別が失われてからは、大部分の入声字にかつての入声重点(漢字の右下)を加点する資料の方が多い。これは、加点位置の体系として、漢字の四隅の一つである右下が選ばれたものと考えられる。

## 2. 平声軽の場合

一方、平声軽は、時代とともに減少し、鎌倉時代末期にはかつての平声軽字に平声重点が加点される例の方が多くなる〔蒙求〕一三二〇年頃点、醍醐寺本『遊仙窟』一三四四年点など。

平声の場合は、どの資料も一樣に、平声軽が平声重に変わった例が多数を占め、かつての平声重字に平声軽点を加点した例は例外的である。この変化は、一方向に起こっているのである<sup>(13)</sup>。

よって、平声軽(下降調)に所属していた漢字の調値が、平声重の調値(低平調)に変化したものと考えられる。

では、なぜ、平声重の調値に統合されたのであろうか。平声の場合は、平声軽と平声重とのそれぞれの統合前の漢字数は、入声の場合と違って、大差がないのである。

これは、おそらく、調値の体系の問題として考えなければならぬのであろう。

仮に、平声重が消滅して、平声軽に統合されたとすると、下降調(平声軽・高平調(上声)・上昇調(去声)・入破音(入声))という体系になる。これは、低平調を欠き、当時の和語・呉音と比べて不自然なものである。よって、呉音と同じ、低平調(平声重)・高平調(上声)・上昇調(去声)・入破音(入声)という体系に落ち着こうとして、平声軽(下降調)ではなく、平声重(低平調)が残ったと考えられる。

#### 四、軽声の消滅理由

##### 1. 漢音声調の特殊性

軽声を無くした漢音声調は、呉音と同じ四声体系となったが、その内容は呉音と同じものではない。漢音には、去声が上声に変化するという声調変化が無いことが指摘されているのである。<sup>(14)</sup> すなわち、呉音に生じた次の変化が、漢音には見られないとされている。

①上声・去声が続く時、去声が上声になる。

②一音節字は、去声から上声になる。

左に、これらが漢音には無かったものかどうかを確認しておきたい。

①の連音上の声調変化が漢音にも生じたならば、各漢字の声調を整理した表は、『廣韻』と大きくずれるはずである。<sup>(15)</sup> しかし、鎌倉時代以降、時代が降ってもそうはならない。

上声・去声<sub>1</sub>に去声が続く具体例を、鎌倉後期の東洋文庫蔵『論語』正和四年(二三一五)点より、若干挙げる(声点以外の注は省略する)。

子(上夏)去(一六七) 子(上賁)去(一八二) 順(去)一帝(去)二二二 太(去)一守(去)一一二二

よって、①が漢音に見られなかったのは明らかである。

次に、②について検討する。

呉音における一音節去声字の上声化は、鎌倉時代中期にはほぼ完了していたと考えられる。<sup>(16)</sup> そこで、鎌倉時代中期の漢音資料の代表として、金沢文庫本『群書治要』経部一二五三〇一二五七年点の声点を、各声調ごとに一音節・二音節に分けると、次のようになる。<sup>(17)</sup>

日本漢音における軽声の消滅について

表一

	一音節	二音節	計
平	245	641	886
平輕	25	223	248
上	141	279	420
去	297	759	1056
入輕	36	128	164
入	78	204	282
計	822	2234	3056

右の表に見られるとおり、一音節の去声字は、一音節字全体の中で、決して少なくない。

しかし、あるいは、漢音においては、呉音よりもこの変化が遅れたものかもしれない。そこで、四声体系の初期の資料と目される書陵部蔵『老子』一三八六年点の声点を同様に処理すると、次表の如くである。

表二

	一音節	二音節	計
平	101	188	289
平輕	0	0	0
上	62	62	124
去	80	254	334
入輕	0	0	0
入	46	138	184
計	289	642	931



この時点でも、一音節の去声字は、無くならない。

さらに、声点加点が見られなくなる直前の清原宣賢加點『毛詩』一五二一年点を見る。結果は、左表のとおりである。<sup>(18)</sup>

表三

	一音節	二音節	計
平	54	158	212
平軽	0	0	0
上	65	50	115
去	98	159	257
入軽	0	0	0
入	19	46	65
計	236	413	649

やはり、一音節去声字は、少なくない。

よって、日本漢音においては、②一音節去声字の上声化は、一般的ではなかったことが知られる。<sup>(19)</sup>

右の考察から、漢音においては、呉音に見られた①②の声調変化は起こらなかったことが確認された。

ここで問題にした呉音の声調変化①②は、和語のアクセント変化の影響を被った和化事象として捉えられている。

①は、語アクセントの中低型を避けたための現象である。漢音の場合、平声軽の後に平声軽・上声・去声が続いたときにも中低型が実現するが、これらも避けられていない。具体例を先と同じく、東洋文庫蔵『論語』正和四年(一三二五)点より挙げる(声点以外の注は省略する)。

篇(平軽)一章(平軽) (二二四) 齊(平軽)一古(上) (二二四) 章(平軽)一句(去) (二二〇)

さらに、和語では、③一音節の平声軽が上声になるといふ変化が生じたが、漢音では、先に見たとおり、平声軽は上

日本漢音における軽声の消滅について

声にはならず、平声重に変化している。

右のごとく、漢音声調は和語・呉音の声調と異なる点が多い。よって、漢音において軽声が無くなる原因を、和化事象と考えることには、躊躇されるのである。

では、漢音においては、なぜ、右の①②の声調変化が及ばなかったのか。また、漢音には、③が生じないのはなぜか。これらの疑問は、次のように言い換えることができる。

- ①一語中のアクセントの谷が、なぜ許されたのか。
- ②一音節去声字が、なぜ去声のままではいられたのか。
- ③平声軽が上声にならず、なぜ平声重になったのか。

要するに、漢音声調の特殊性は、本来の単字声調を維持したこと、また、平声軽を平声の範疇で捉えたことである。これは、〈単語〉として日本語の自然なアクセントに変更することなく、〈漢字〉本来の声調を維持したということである。

## 2. 漢字の声調を維持できた理由

日本漢音は、中国原音を伝えたものの上に韻書や字書からの字習音がかぶさったものを、当該漢籍の読みとして、伝えてきた歴史があった。<sup>(21)</sup>

漢籍訓点資料には、時代とともに例数は減少するものの、反切の書き込みが見られる。また、一字に二つの声点を加点した例があり、その両点とも『廣韻』に掲載されている声調と一致する場合がある。さらに、そのどちらかに合点を加点した例もある。

和語・呉音のアクセントの影響をほとんど受けず、〈漢字〉の声調を維持できたのは、この伝承の力によるものであつ

たと考えられる。

入声における軽重の区別も、原音に忠実にあろうとつとめた漢音であればこそできたものであろう。上声全濁字が去声に移行した声調を伝えることができたのも、伝承漢音を忠実に伝えようとしたためと考えられる。一音節去声が残ったのも、この力に依るものであろう。

一方、一音節去声が残った要因には、韻書や字書からの学習も考えられる。平声軽が上声に変化せず平声重になるのも、漢字音においては、平声軽は平声に属するという認識が、韻書の学習を通して存在していたことの反映ではないだろうか。平声軽は、平声重と同じく平声の範疇で捉えられたのである。<sup>(22)</sup>

また、漢詩作製の必要上から、『切韻』系韻書に基づく韻書・字書が我が国で作られ、それによる学習が盛んであって、当該字の〈四声〉を意識する機会が多かったことも、これを助けたのであろう。<sup>(23)</sup>

### 3. 軽声の消滅理由

#### a. 平声軽の場合

和語における平声軽音節の減少は、院政時代に始まる。<sup>(24)</sup> また、和語・呉音における一音節去声の減少も院政時代に始まる。これらの変化は、日本語において、長音が音韻として独立したことの反映であると考えられている。<sup>(25)</sup> それまで、長めに発音して曲調音節を実現していたものが、長音が音韻として独立したために、それができなくなるとされるのである。

この長音の音韻としての独立は、漢音の平声軽の発音にも及んだ可能性がある。そこで、一音節字と二音節字とを分けて検討する必要がある。

漢音では、一音節字として受容した漢字よりも二音節字として受容した漢字の方が多い。比較的古い時代の一実態と

して、『蒙求』平安中期点を見ると、平声軽における一音節字対二音節字の数は、一対四程度である。これが、初期の漢音資料における割合を示すものと見られる。

ところが、時代が降ると、平声軽における一音節字の割合が低くなる。

『蒙求』諸本における平声軽字を日本漢音の音節数によって分けると、次の通りである。

一音節 二音節

故宮博物院藏院十二世紀後半点	14	99
東洋文庫藏鎌倉後期点	19	267
天理図書館藏一三二〇年頃点	10	51
天理図書館藏一三四五年点	34	231
真福寺藏南北朝期点	3	21
大東急記念文庫藏一三七四年頃点	9	87

この現象は、東洋文庫藏鎌倉後期点で顕著である。この資料で、一音節平声軽に数えた中には、「司<sup>シキ</sup>平<sup>ヘイ</sup>輕<sup>キョウ</sup>・詞<sup>シ</sup>平<sup>ヘイ</sup>輕<sup>キョウ</sup>・思<sup>シ</sup>平<sup>ヘイ</sup>輕<sup>キョウ</sup>」などを含み、二拍分の長さで発音されるものに平声軽が残ったことが知られる。次の例は、「チ」には平声軽、「チ」には平声重の加点がされているものである。

郗<sup>チ</sup>平<sup>ヘイ</sup>輕<sup>キョウ</sup>超<sup>チウ</sup>平<sup>ヘイ</sup>輕<sup>キョウ</sup>髻<sup>セキ</sup>平<sup>ヘイ</sup>輕<sup>キョウ</sup>参<sup>サン</sup>平<sup>ヘイ</sup>輕<sup>キョウ</sup> (15句目)

郗<sup>チ</sup>平<sup>ヘイ</sup>輕<sup>キョウ</sup>鑿<sup>カク</sup>吐<sup>ト</sup>平<sup>ヘイ</sup>輕<sup>キョウ</sup> (52句目)

先に掲げた音節数別の表のうち、金沢文庫本『群書治要』経部一二五三〜一二五七点でも、平声軽に一音節字が少なかった(表一参照)。

これらのことから、中国中古音で同じく平声の同一声母字であっても、日本漢音としての受容が一音節か二音節かに

よつて、平声軽として残るかどうかが大きく左右されていると見られる。

これは、漢音においても、院政期以降、平声軽という下降調は、二音節の方が一音節に比べて実現しやすかったことを反映するものと思われる。

古音を伝承しようとした漢音は、すぐには一音節の平声軽を消さなかつたが、呉音には元より無く、和語にも既に無い平声軽の音節（音節内下降調）をとどめることは困難だったのであろう。

こうして、総数を減らした平声軽は、南北朝期以後次第に、調値が理解されなくなつてしまつたのではないだろうか。そして、二音節字の平声軽も、平声のなかで多数を占めることになつた平声重（低平調）に統合されたものと思われる。<sup>(26)</sup>

#### b. 入声軽の場合

入声の軽重の区別は、和語・呉音に本来無く、その伝承が当初から困難であつたものであろう。そのため、平声軽よりもはやく重声との区別を失なつたものと考えられる。

### 五、軽声消滅後の四声体系と『廣韻』声調・清濁との対応関係

六声体系から變つた四声体系は、軽声が消滅した以外に六声体系との相違点はないのであろうか。そこで、四声体系になつた漢音声調の内容を知るために、『廣韻』声調・清濁との対応表を作つてみる。

このたびの調査で、四声体系となる最初の資料と見られた64書陵部蔵『老子』の声点を整理すると、次頁の表四となる。

表四を見ると、『廣韻』の声調・清濁との対応の仕方は、呉音とは異なる。また、『廣韻』の四声と完全に一致するものでもない。上声全濁字に去声化したものがある、日本漢音の声調体系である。ただ、軽声が見られないのである。

この状態は、室町時代末期の清原宣賢の加点資料に至つても同様である。<sup>(27)</sup>

日本漢音における軽声の消滅について

表四 書陵部藏『老子』1386年点

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声				計
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	
平	79	27	69	75	1	1	1	2		1	1	1					258
平輕																	0
上	5	1	3	1	49	14	9	26	2	4	4	6					124
去	5	2	1	3	2	3	57	6	90	20	70	75					334
入輕																	0
入									1				59	29	50	45	184

鎌倉時代語研究

## 六、軽声点の消滅が意味するもの

これまで見てきたように、軽声点が加<sub>レ</sub>点されなくなる直接の原因は、軽重の調値の区別が無くなったことである。しかし、調値上の区別が無くなった時期と軽声点が無くなる時期とは一致しない。

先に、重声との調値の統合は、入声軽の方が平声軽よりも早かったことを確認した。しかし、それにも拘わらず、入声軽点<sub>レ</sub>が平声軽点よりも早く消滅するのではなく、入声軽点と平声軽点とは、同時に無くなるのである。すなわち、平声・入声に軽重を区別する六声体系から、平声にのみ軽重を区別する五声体系を経て、四声体系になったのではなく、六声体系から四声体系に一度に移行している（後掲「一覽表」参照）。

また、鎌倉時代末期には、平声・入声の軽重の調値の区別は無くなっていたと考えられるのに、平声軽点・入声軽点<sub>レ</sub>は、南北朝期に入つてもしばらくは加<sub>レ</sub>点し続けられる。そして、南北朝期の半ばに至つて、両点ともに消滅する。

よつて、南北朝期に入つてからは、調値上区別ができないにも拘わらず、軽点を加<sub>レ</sub>点し続けたことになる。これは、伝統の訓説の形を守ろうとしたということであろう。

調値上区別が無くなつてもなお軽点を加<sub>レ</sub>点し続けた理由が、伝統を守つたことであるならば、軽点の消滅は、その伝承の途絶を意味するものであろう。<sup>(28)</sup>

## 七、むすび

以上、本稿の考察をまとめると、次のとおりである。

1. 軽声の加<sub>レ</sub>点が見られなくなる時期は、漢籍においては、南北朝時代の後半からである。
2. 入声軽の調値（高平調入破音）は変わらず、平声軽はかつての平声重（低平調）の調値となった。

3. 入声軽は、入声重との区別の困難さ故に、入声重と一つになったと思われる。
4. 平声軽の一音節字は、長音の音韻的独立によって下降調を保ち得ず、平声重（低平調）となったと思われる。
5. 平声軽の二音節字は、平声軽字の減少に伴い平声軽の調値（平声軽点の意味）が理解できなくなった結果、平声重（低平調）となったと思われる。
6. その結果できた四声体系は、上声全濁字の去声化を反映する日本漢音声調であった。
- はじめに設定した問題についての考察は以上である。このほか、次の点が明らかにされた。
7. 漢音では、一音節去声の上声化は見られない。
8. 南北朝期の後半には、漢籍における漢音声調の伝承の力が弱まっていた。

## 付、声点加 points の衰退

日本に残存する漢音資料を見ると、比較的古いものには必ず声点が加點されており、漢音の学習は声調学習を常に伴ったことが知られる。鎌倉・南北朝時代に入っても、「一覽表」に挙げた漢籍訓点資料を見る限りは、原則として声点が見られ、その伝統が守られていたと考えられる。<sup>(29)</sup>

ところが、「一覽表」によると、室町時代に入ると声点がまったく加點されない資料が出てくる。これは、漢音声調の学習が、漢音学習にとって必須のものでなくなったことの反映であろう。

声点加點が見られない資料は、具体的には、次のものである。

資料番号 75 書陵部藏『文選』。これは、紀伝点（藤原式家）による加點である。

資料番号 81・82・88・95・97・98・99・104・105・110・112・115・118・119・120・122・123・124・125 は、いずれもヲコト点を使用せず、いわゆる仮名点による加點資料である。ヲコト点を継承しない資料から声点も消えていることが確認できる。



また、資料番号95～99は、清原宣賢の加点資料ではあるが、ヲコト点を使用しないものがあり、声点加点が見られない。これらは、『三略講義』『胡曾詩』『司馬法』『易学啓蒙通釈』『胡曾詠詩注』といった漢籍であり、頼業以来清原家が訓説を伝えてきた経子書ではない。当時の碩学宣賢をもってしても、声点を加点した書は限られていたのである。ここに至って、漢音声調は、伝統の訓説を保守しようとした場合以外は必要でなくなったと考えられるのである。<sup>(30)</sup>

## 注

- (1) 沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』第二部第四章第三節「漢音に於る六声体系」参照。
- (2) 柏谷嘉弘「圖書寮本文鏡秘府論の字音声点」(『国語学』第六一輯、一九六五年六月)、佐々木勇「日本漢音の轻声減少について——漢音の国語化の二側面——」(『国語国文』第六四卷第十号、一九九五年十月) 参照。
- (3) 佐々木勇「蒙求」における日本漢音声調の伝承と衰退」(『訓点語と訓点資料』第九十九輯、一九九七年三月) 参照。
- (4) 仏典に関しては、声明の節博士の分析から、平声・入声に軽重を区別する六声体系が今に伝わることが明らかにされている(頼惟勤「漢音の声明とその声調」(『言語研究』第十七・十八合刊号、一九五一年三月)。ただし、入声の軽重の区別は判然としない声明もある。また、この音は、厳密には「新漢音」である。さらに多くの資料の分析が課題として残っている。
- (5) 調査の欄で複製としたものの内、公刊されていない資料はそれぞれ以下のものに基づく。資料番号3・13・75・83は広島大学文学部蔵の紙焼写真。17・18・33・43・56は斯道文庫蔵紙焼写真。30は小林芳規先生蔵紙焼写真。また、論文とは、次のものである。「古文孝経」は、阿部隆一「古文孝経旧鈔本の研究(資料篇)」(『斯道文庫論集』第六輯、一九六八年三月)。資料番号4は小林芳規「醍醐寺蔵論語卷第七文永五年點」(醍醐寺文化財研究所「研究紀要」第二号、一九七九年)。29は小林芳規「仁和寺蔵秦中吟延慶二年書写加点本」(『訓点語と訓点資料』第四十一輯、一九七〇年六月)である。声調体系の欄の×は、声点が加点されていないことを示す。
- (6) なお、「一覽表」の中で、五声としたものがある。資料番号10・18・34・35である。これは、いずれも声点の加点が粗であつて、平声軽または入声軽が見出せないものである。また、両方の軽声が無く、四声としたものもある。番号43『文選』であ

る。これらは、いずれも藤原家の訓点を伝える資料である。もし、藤原家の訓点であることに意味があるとすれば、藤原家訓は、菅原家訓などと比べて和文的であるという指摘（小林芳規『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』）と関係が有るかもしれない。この度は、写真複製による調査でもあり、資料数が少ないため不明の点が多い。さらに、多くの藤原家訓点本を調査したい。

(7) f 国立国会図書館蔵一四〇〇年頃点まで六声が見られ、訓点資料の場合と比べて遅くまで軽声が加点されているように見える。しかし、fを一四〇〇年頃点としたのは、e 大東急記念文庫蔵応安七年（一三七四）版の後印本であるという根拠による荒い推定であった。この度の調査によって、f 点は、応安七年（一三七四）により近い時期の加点と考える方が良さそうである。

(8) 同様の指摘には、他に石塚晴通「小川広巳氏蔵大東急記念文庫蔵孔雀経単字解題」〔古辞書音義集成17〕へ汲古書院、一九八三年ノ所収。〕などがある。

(9) 注(4) 類論文、金田一春彦「日本四声古義」〔国語アクセント論叢〕へ一九五一年十二月、法政大学出版局ノ所収。〕参照。

(10) 注(3) 佐々木論文、参照。

(11) 沼本克明「高山寺蔵理趣経鎌倉期点」〔鎌倉時代語研究〕第六輯、一九八三年五月。参照。

(12) 東洋文庫蔵『蒙求』鎌倉後期点がこれにあたる。佐々木勇「日本漢音に於ける声調変化——岩崎本『蒙求』を中心に——」〔新大國語〕第十四号、一九八八年三月、参照。

(13) 注(2) 柏谷論文に指摘あり。

(14) 注(1) 沼本著書、四九頁。

(15) 佐々木勇「十一〜十三世紀における法相宗の漢音」〔鎌倉時代語研究〕第十八輯、一九九五年八月、同注(2) 論文、同「清原宣賢の漢音声調——十六世紀前半の実態把握のために——」〔国文学攷〕第一五四号、一九九七年六月、および本稿の表四、参照。

(16) 沼本克明『日本漢字音の歴史』（東京堂出版、一九八六年）二六二頁、佐々木勇「異音—音節去声字の上声化の過程」〔鎌倉時代語研究〕第十輯、一九八七年五月。参照。

(17) この表は、注(2) 佐々木論文に掲げている。以下の音節数の認定方法もこの論文の場合と同様である。

(18) ただし、金沢文庫本『群書治要』所収『毛詩』と同一本文を持つ部分の用例数である。「廣韻」声調・清濁との対応表は、佐々木勇「清原宣賢の漢音声調——十六世紀前半の実態把握のために——」(『国文学放』第一五四号、一九九七年六月)に掲げた。

(19) 『蒙求』諸本についても同様であるが、『蒙求』の中には、例外的に、この変化を反映する資料がある(注(12)佐々木論文、参照)。

(20) 小松英雄『日本声調史論考』(風間書房、一九七一年)第II部第5章、参照。

(21) 注(1)沼本著書、参照。

(22) 漢音の平声軽が、和語と比べて遅くまで残るのは、次項に見るように、二音節字を持っていたためである。

(23) 作詩の折、平仄を知るための字書『平他字類抄』が鎌倉時代に編まれ、室町時代になるとそれを簡略にした『伊呂波字平它』『色葉文字』『新韻集』が世に出ている。

(24) 注(20)に同じ。

(25) 注(16)沼本著書二六五頁、参照。

(26) 平声軽と同じく曲調音節である去声音節(一音節去声)が漢音において後まで残った理由は、先に考えたとおりである。すなわち、去声音節が曲調を避けようとする、和語・呉音と同じく上声に変化するのが自然である。ところが、去声から上声になると、別の声調の所属が変わる。このことが避けられたものと考ええる。一音節平声軽が上声にならず、平声重になったときに働いたのと同じ力、すなわち、〈四声〉のうち、本来どこに属するのかわからないという規範力が一音節去声字の上声化を妨げたものと考えられる。

(27) 注(18)佐々木論文、参照。

(28) 資料番号14『論語集解』一五七二年写本には、巻末に点図が記されている。その声点の壺には、軽声点も記されている。しかし、平声軽点、平声点よりも上声点に近く、入声軽点、入声と去声との中間に記されている。これは、軽声を理解して書かれたものとは思われない。事実、この資料の実際の加点には、軽点は一切見られない。この後も、点図集には、広島大学蔵『讀書訳点』享保十一年(一七二六)写本など、軽声を掲げるものがあるが、形式的なものと考えざるべきであろう。和語の平声軽は、京都方言などには一部の語に残っており、完全には消滅していない。それに対して、漢音の平声軽は、完全に消滅

する。体系の一つの位置を失うのである。

同じく南北朝期に、漢音の特殊性が失われる徴候が見られるものとして、諄韻舌齒音字の仮名遣が指摘されている(沼本克明「臻撰合転舌齒音字の仮名遣について」〈信州大学人文科学論集〉第十四号、一九八〇年三月)。

(29) 鎌倉時代後期に声点加点が見られない資料として25『尚書正義』一三〇三年点があるが、本資料の訓点は星点のみであり、この期の訓点本として特異なものである。

(30) 注(18)佐々木論文、参照。

(付記) 本稿は、平成九年度鎌倉時代語研究会夏期研究会での発表をもとに執筆したものである。席上、小林芳規・沼本克明両先生よりご教示いただいた。これによって、後半部分を改稿することができた。記して、感謝の意を表する次第である。

## 別表 一覧表

番号	加点点代	所蔵	書名	声調体系	加点点者	訓点の系統	調査
一	二五〇～二五七	書陵部	群書治要 経部	六声	清原教隆	清原家点	複製
二	二六〇	書陵部	群書治要 子部	六声	清原教隆	藤原家・清原家点	複製
三	二六八・二六九	書陵部	春秋経傳集解	六声	藤原直隆・俊隆	明経点	複製
四	二六八	醍醐寺	論語 卷七	六声	中原師秀	古紀伝点	複製
五	二六八	東洋文庫	論語 卷八	六声	中原師秀	古紀伝点	複製
六	鎌倉中期	書陵部	群書治要 魏志	六声	(不明)	藤原俊國点	複製
七	鎌倉中期	書陵部	群書治要 後漢書	六声	北條実時	藤原俊國点	複製
八	鎌倉中期	武田長兵衛	古文孝経	六声	清原某	清原家点	複製
九	二五・二七六	書陵部	群書治要 漢書	六声	北條実時	藤原茂範点	複製
一〇	二七六	書陵部	群書治要 史記	五声	(不明)	藤原茂範点	複製
一一	二七七	三千院	古文孝経	六声	金王麿	紀伝点・清原家点	複製

二二	一三九	書陵部	貞觀政要 卷一	六声	睿證	紀伝点	複製
二三	一三八	書陵部	春秋経傳集解	六声	清原俊隆	明経点	複製
二四	一三九	阿部家旧蔵	古文孝経	六声	清原良枝	清原家点	複製
二五	一六二	猿投神社	文選	六声	(不明)	紀伝点	複製
二六	一六四	金沢文庫	弘決外典抄	六声	仏師圓種	仮名点	複製
二七	一六九	天理図書館	白氏文集	六声	蔽祐	仮名点	複製
二八	一八九	東山御文庫	文選 卷第二九	五声	藤原長英か	紀伝点	複製
二九	一九三	天理図書館	白氏文集	六声	長福寺僧	清原家点	複製
三〇	一九三	大東急記念文庫	古文孝経	六声	(不明)	清原家点	論文
三一	一九九	書陵部	古文孝経	六声	清原教有	清原家点	複製
三二	二〇〇	正宗敦夫文庫	長恨歌	六声	六条有房	古紀伝点	複製
三三	二〇〇	猿投神社	文選	六声	(不明)	紀伝点	複製
三四	二〇一	天理図書館	古文孝経	六声	清原某	清原家点	論文
三五	二〇一・二〇四	書陵部	尚書正義	×	仏師圓種	第五群点	複製
三六	二〇三	高山寺	論語 卷四・八	六声	了尊	中原家点	複製
三七	二〇六	書陵部	群書治要 普書	六声	北条貞顕	藤原俊國・経雄点	複製
三八	二〇六	東洋文庫	古文孝経	六声	(不明)	清原家点	論文
三九	二〇七	仁和寺	秦中吟	六声	阿闍梨祐恵	藤原家・菅原家点	複製
四〇	二一三・二一四	神宮徴古館	古文尚書	四声か	清原長隆	清原家点	複製
四一	二一五	東洋文庫	論語	六声	(不明)	清原家点	複製
四二	二一五	鎌倉後期	毛詩	六声	(不明)	紀伝点	複製
四三	二一五	鎌倉後期	古文孝経	六声	(不明)	清原家点	複製
四四	二一五	鎌倉後期	群書治要 蜀志	五声	清原隆重	藤原俊國点	複製
四五	二一五	鎌倉後期	群書治要 吳志	五声	清原隆重	藤原俊國点	複製
四六	二二二	書陵部	古文孝経	六声	清原良枝	清原家点	複製

日本漢音における軽声の消滅について

七〇	三三三	天理図書館	古文尚書	六声	藤原長頼	中原家点	複製
六九	三三五	書陵部	新樂府	六声	濟氏	紀伝点	
四〇	三三七・三三六	書陵部	論語集解	六声	禅澄	清原家点	
四〇	三三〇	書陵部	古文孝經	六声	良賢	清原家点	
四〇	三三〇	東洋文庫	古文尚書	六声	中原康隆	明経点	
四〇	三三〇	天理図書館	文選	六声	(不明)	紀伝点	
四〇	三三三頃	東山御文庫	文選	四声か	藤原師英	紀伝点	
四〇	三三三	穗久邇文庫	五行大義	六声	僧智圓相伝	古紀伝点	
四〇	鎌倉末期	京都大学図書館	古文孝經	六声	清原某	清原家点	
四〇	三三七	大東急記念文庫	論語 卷一、六	六声	清原頼元	清原家点	
四〇	三三二	大東急記念文庫	論語 卷七、十	六声	清原良兼	清原家点	
四〇	三三〇	醍醐寺	遊仙窟	六声	宗算	紀伝点	
四〇	三三六	(模刻本)	論語集解	六声	深尊	清原家点	
四〇	三三七	東洋文庫	論語	六声	藤原宗重	明経点	
四〇	三三三	猿投神社	白氏文集	六声	沙門浄盛	紀伝点	
四〇	三三三	猿投神社	白氏文集	六声	千若丸	紀伝点	
四〇	三三三	猿投神社	遊仙窟	六声	賢智	紀伝点	
四〇	三三三	天理図書館	古文尚書	六声	喜久寿丸	紀伝点	
四〇	三三六	京都大学図書館	古文孝經	六声	清原教氏	清原家点	
四〇	三三六	賀茂別雷神社	古文孝經	六声	実祐	博士家点	
四〇	三三三	猿投神社	論語 卷三・七・十	六声	甚海	明経点	
四〇	三三三	猿投神社	白氏文集	六声	澄豪等	紀伝点	
四〇	三三三	猿投神社	白氏文集	六声	澄豪	紀伝点	
四〇	三三七	猿投神社	白氏文集	六声	永範書写	紀伝点	
四〇	三三六	慶応大学図書館	帝範	六声	良賢	紀伝点	

三	一三七	梅沢記念館	老子道德經	六声	桑門(花押)	中原家点	複製
三	一三一	書陵部	孟子	六声	(不明)	紀伝点	
三	一三六	書陵部	老子道德經	四声	慶秀	清原家点	
三	一三九	陽明文庫	遊仙窟	四声	圓賀	紀伝点	複製
三	三三〇	斯道文庫	老子道德經	四声	(不明)	假名点	
三	三三〇	東洋文庫	白氏文集	六声	(不明)	紀伝点	複製
三	三三〇	高山寺	莊子 乙卷	六声	(不明)	古紀伝点	複製
三	三三〇	猿投神社	帝範・巨軌	六声	(不明)	紀伝点	複製
三	三三〇	東洋文庫	中庸	四声	(不明)	明経点・中原家点	複製
三	三三〇	静嘉堂文庫	古文尚書	四声	(不明)	清原家点	複製
三	三三〇	室町初期	孟子	四声	(不明)	紀伝点・明経点	
三	三三〇	室町初期	周易注疏	四声	(不明)	明経点	
三	三三〇	室町初期	論語	四声	青華道人	清原家点	複製
三	三三〇	斯道文庫	文選	四声	重志・鼎志・鼎子	紀伝点	複製
三	三三〇	書陵部	古文孝經	四声	(不明)	紀伝点	複製
三	三三〇	書陵部	古文孝經	四声	(不明)	博士家点	複製
三	三三〇	斯道文庫	古文孝經	四声	(不明)	博士家点	複製
三	三三〇	穗久邇文庫	古文孝經	四声	(不明)	明経点	複製
三	三三〇	尊経閣文庫	古文孝經	四声	藤原親長	古紀伝点・清原家点	複製
三	三三〇	東洋文庫	論語	四声	三条西実隆	假名点	
三	三三〇	東京大学総合図書館	論語	×	春浦宗熙禅師	假名点	
三	三三〇	東京大学総合図書館	論語集解	×	主水正章政	假名点	
三	三三〇	書陵部	史記	四声	三条西公條	藤原英房点	複製
三	三三〇	京都大学図書館	古文孝經	四声	右少将(花押)	清原家点	複製
三	三三〇	大東急記念文庫	毛詩	四声	清原宣賢	清原家点	複製
三	三三〇	成實堂文庫	尚書	四声	清原宣賢	清原家点	複製

日本漢音における輕声の消滅について

六七	一五二四	京都大学図書館	大学	四声	清原宣賢	清原家点	論文
六八	一五二五	東洋文庫	論語	×	(不明)	仮名点	
六九	一五二五	京都大学図書館	春秋経傳集解	四声	清原宣賢	清原家点	
七〇	一五二六	京都大学図書館	孟子	四声	清原宣賢	清原家点	
七一	一五二九	書陵部	禮記	四声	清原宣賢	清原家点	
七二	一五三〇	書陵部	春秋経傳集解	四声	清原宣賢	清原家点	
七三	一五三一	静嘉堂文庫	毛詩	四声	清原宣賢	清原家点	
七四	一五三一	静嘉堂文庫	春秋経傳集解	四声	清原宣賢	清原家点	
七五	一五三一	京都大学図書館	三略講義	×	清原宣賢	清原家点	
七六	一五三一	京都大学図書館	胡曾詩	×	清原宣賢	仮名点	
七七	一五三一	京都大学図書館	司馬法	×	清原宣賢	仮名点	
七八	一五三一	京都大学図書館	易学啓蒙通釈	×	清原宣賢	仮名点	
七九	一五三一	京都大学図書館	胡曾詠史詩注	×	清原宣賢	仮名点	
八〇	一五三一	書陵部	大学	四声	(不明)	清原家点	
八一	一五三一	京都大学図書館	論語	×	(不明)	清原家点	
八二	一五三一	京都大学図書館	中庸	×	(不明)	清原家点	
八三	一五三一	京都大学図書館	古文孝経	四声	(不明)	清原家点	
八四	一五三一	大東急記念文庫	孝経直解	×	(不明)	仮名点	
八五	一五三二	東洋文庫	春秋経傳集解	×	(不明)	仮名点	
八六	一五三二	内閣文庫	古文孝経	四声	清原宣賢	清原家点	
八七	一五三二	天理図書館	古文孝経	六声	清原枝賢	清原家点	
八八	一五三二	天理図書館	古文孝経	四声	沙彌道恵	清原家点	
八九	一五三二	東洋文庫	論語	四声	清原枝賢	清原家点	
九〇	一五三二	東洋文庫	論語	四声	清原陶氏	仮名点	
九一	一五三七	仁和寺	古文孝経	四声	仁和寺沙門	菅原長雅点	



二二	一五三	東洋文庫	論語	×	義住	仮名点	
二三	一五七	東洋文庫	孟子	四声	聖信	清原家点	
二四	一六一	京都大学図書館	論語集解	四声	吉田梵舜	清原家点	
二五	一六一	東洋文庫	錦繡段	×	(不明)	仮名点	
二六	一五一	東洋文庫	論語	四声	清原枝賢	清原家点	
二七	一五七	京都大学図書館	論語	四声	清原枝賢	清原家点	
二八	一五七	東洋文庫	孝経直解	×	秀圓	仮名点	
二九	天正年間	東洋文庫	老子経	×	(不明)	仮名点	
三〇	一五三	東洋文庫	長恨歌琵琶行	×	(不明)	仮名点	
三一	一五一	大東急記念文庫	古文孝経	四声	三十郎三慶	清原家点	論文
三二	一五三	東洋文庫	古文真宝	×	(不明)	仮名点	
三三	一五三	東洋文庫	孝経直解	×	(不明)	仮名点	
三四	桃山時代	東京大学総合図書館	論語	×	(不明)	仮名点	
三五	桃山時代	内閣文庫	周易正義	×	月軒	仮名点	
三六	桃山時代	書陵部	尚書	四声	(不明)	清原家点	
三七	桃山時代	東洋文庫	古文孝経	四声	(不明)	清原家点	
三八	桃山時代	神宮文庫	古文孝経	四声	(不明)	清原家点	
三九	桃山時代	鈴鹿三七	古文孝経	四声	(不明)	清原家・中原家点	論文
四〇	江戸初期	東洋文庫	論語	六声	(不明)	博士家点	
四一	江戸初期	岩瀬文庫	古文孝経	四声	(不明)	博士家点	論文